

韓国の海村社会における 老人集団と村祭り

——「老班会」を中心に——

崔 杉 昌

はじめに

本稿は韓国慶尚北道の東海岸に伝承されている「老班会」についての考察である。「老班会」は蔚珍地域の海村部に顕著に現れる村落社会の自治組織であると同時に祭祀組織でもある。今のところ、当地域に限られて見られるのが特徴であるが、ここでは「老班会」の実態と、それがどのように機能しているかを把握し、当該地域の社会構造を解明することを目的とする。

村落社会とは、集団を形成する村落が農地または漁場などの生産手段を共同に所有、管理するので生産共同体であり、村落という地域集団を単位とする共同体であるため、地縁共同体とも称する¹⁾。このような性格をもつ村落共同体は現代社会の中で一体どのくらい残存しているのだろうか。私有財産制度や資本主義の発展と共に伝統的性格をもつ村落共同体は終局には解体してしまうのだろうか。あるいは村落は存在しても「共同体」としての性格は半減ないし消滅してしまうのだろうか。東海岸の民俗社会に限って言えば、少なくとも時代的影響による変貌の様子を見せてはいる

* 本学兼任講師

キーワード：海村，老班会，洞祭，オルン

が、まだ依然として共同体として機能している村落社会は少なくない。特に信仰の面においては実に多くの村が地域の祭神としてコルメギ洞神を祭り、それを通して村社会のまとまりを図ろうとしていたことが伺える。

東海岸は韓国における民俗の宝庫でもある。従来の東海岸地域を対象とする多くの民俗研究は巫歌や堂神話を中心に行われてきた。民俗を生成し、保持してきた民俗の伝承母体としての地域社会そのものについての研究は一部²⁾を除くとまだ乏しいのが現実である。その中で日韓の共同研究の成果として出された『日韓合同学術調査報告（第二輯）——韓国慶尚北道平海邑厚浦里——』³⁾は東沿岸地域の生業及び社会文化的な側面をとらえたものとして注目される。特に同報告書の中で崔在律の「漁村自治共同体の残存形態」、玄容駿の「厚浦・直山の村祭り」、松本誠一の「東海岸狗岩のコルメギ洞神祭と洞組織」を通して、この地域の洞組織である「老班会」の事例が初めて報告された。その後、松本誠一の情報提供により、同地域を調査した金宅圭は民俗祭儀の班礼化現象及び老班会の役割について報告し⁴⁾、のちには『東海岸漁村民俗誌』⁵⁾にその研究成果を取めている。また、権三文による直古洞における調査報告は老班会調査として注目に値するものである⁶⁾。

本章はこうした研究成果を踏まえたうえで老班会の実態を再検討する。また老班会の構成にはどうやら年齢的階層が見られるようである。これは従来の韓国民俗学においてほとんど考察されなかった年齢的要素が、村運営に何らかの形で働いていることを意味する。老班会の構造を通してこの点についても見てみたい。

II 直古洞の老班会とその構成

1 老班会の仕組み

キョンサンブクトウルチンダン

慶尚北道蔚珍郡の沿岸地域には「老班会」⁷⁾という洞組織が存在する。

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

ピョンヘオプ チ コドン

平海邑直古洞の「洞規」⁸⁾ 第8条には「老班会は最高の議決機関である」と明示している。以下は直古洞の事例を中心に記述を行う⁹⁾。

蔚珍郡平海邑直古洞は138世帯、382人（2004年現在）の村である。平海邑の16里の中で5番目の規模である。村は東向きで後ろは低い丘陵に囲まれ、前は東海が広がっている。西は平海邑に、南は厚浦里（후포리）に、北は岐城里（기성리）に接している。500余年前に池氏（チ）が入郷し住んだことから池コゲ（峠）と呼んだり、山の形状から雉古洞（チコドン）とも呼んだりした。また、峠が直角になっていることから直古洞といったといわれる。池氏の後には尹氏が入ってきて村を発展させたので、洞神は「池氏トジョン（基盤）に尹氏コルメギ（지씨터전에 윤씨골메기）」であると伝えられている。

高麗時代には平海面南下里（남하리）南山里（남산리）であったが、行政区改編にしたがい1914年に蔚珍郡平海面直山里となった。1944年に直山1と2里に分かれ、1980年12月に平海面が平海邑となった。行政里は直山2里であるが、地元では直古洞（직고개동チコゲドン）と呼んでいる。本章では行政里の洞名ではなく、地元で一般に使われている直古洞を用いて表記することにする。

まず、老班会の仕組みを把握するためには地元で使われている有司（ユサ）、洞首（ドンス）、尊位（チュンイ）、（時）有司、（時）洞首、（時）尊位、（馭）洞首、（馭）尊位の名称について理解しておく必要がある。（時）がついた有司、洞首、尊位は現役の村三役（洞三任）を意味するが、（時）がついてないものは退役した役員を意味する。（馭）がついたものはいわゆる名誉役員を意味する。これはあくまでも名称の区別で、住民は現役と退役を区別しないようである。

老班会は村三役の中で（時）尊位と（時）洞首、そして退役尊位集団と退役洞首集団に構成されている。このような老班会は村の最高組織として少なくとも数百年間にわたり村の秩序と自治を維持していくうえで中核的

表1 老班会の仕組み（…→は地位の移動）

| | 現 役（村三役） | 退 役 |
|-------------|-----------------|--------------------|
| 老 班 会 | | 座上（1名） |
| | （時）尊 位（1名）…………… | …………→ 退役尊位集団・（臥尊位） |
| | （時）洞 首（1名）…………… | …………→ 退役洞首集団・（臥洞首） |
| | （時）有 司（1名）…………… | …………→ 退役有司集団 |

役割を果たしてきたものであると考えられる。

老班会の会員になるためには老班会が規定した手順を踏まなければならない。一般的に老班会員になる条件としては、村のために一定の奉仕が求められる。そのためには、まず有司、洞首などの村の役職に就かなければならない。洞首と有司は1年間村のために奉仕するが、その適任者は老班会が選び、決める。

有司は壮年の住民の中から、洞首は退役有司の中から、（時）尊位は退役洞首の中から1人ずつ選ばれる。（時）有司として1年間無事に役を終えると老班会の追認を経て、はじめて老班名簿に登載される仕組みとなっている。年寄りの中にはこのような経歴を経ないで尊位になることもある。それを臥尊位^{ワチヨニ}という。臥尊位になろうとする人は「老班礼」を行う必要がある。洞規第10条には「臥尊位は65歳以上に資格を賦与し、礼を済まして老班会に出席せねばならない。臥尊位が老班会に参加するためには老班礼を済ませねばならない」と明記されている。しかし、洞規には老班礼の具体的な方法についての言及はない。ただし、「臥洞首は60歳以上、臥尊位は65歳以上」と年齢基準を設けていることから一定の年齢も加入の条件となっていることがわかる。

表1に見られるように、1年間の（時）有司の役を終えると退役有司集

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

団に編入される。(時)洞首はこの退役有司の中から有司歴任順序と年長順、功労などを考慮して決められる。(時)洞首の任期を終えた人は退役洞首集団に編入される。また(時)尊位も同じく退役洞首の中から名簿登載順、年長順、功労を考慮して選ばれる。(時)尊位も1年の任期を終えると退役尊位集団に編入され、老班名簿の尊位欄に登載される。すなわち、(時)有司→退役有司集団→(時)洞首→退役洞首集団→(時)尊位→退役尊位集団→座上への過程を経ながら地位が移動することになる。直古洞の1992年の調査当時の報告には有司グループは20人、洞首グループは23人、尊位グループは17人であった¹⁰⁾。

老班会の首長を「座上」^{チャサン}という。座上は常に退役尊位集団の中から名簿記載順に従って継承される。このように老班会の中での序列はあくまでも名簿記載順であり、年齢は地位が上がる際に考慮されるものの、それを決定する条件ではない。

(時)有司から座上へ移動していく過程の中で、各退役集団に留まる期間にも彼らは常に老班会のメンバーとして村の大小事に関与するようになる。このような過程を通して村の指南役としての資質を磨いていくことになる。こうして(時)洞首と退役洞首集団、(時)尊位と退役尊位集団がまとまって老班会を構成し、最高議決機関として、また諮問役として村を治める。

尊位になるには相当の準備期間を必要とし、尊位になるための過程が長いほど尊位が保つ権威も大きくなる。洞会、別神クツをはじめ、様々な村行事で尊位たちは常に上席に座り、厚く待遇される。

2 老班会の役割と洞中行事

老班会の役割について洞規には洞中大行事の審議決定、洞任(村役員)選抜、洞中財産の管理監督と明記している。それに加えて、洞中重要行事

としての祭祀行事と集会行事も老班会が管掌している。

それでは老班会の役割と行事について具体的にみていきたいと思う。

まず、毎年4月15日と10月15日（いずれも陰暦）の年2回に定期集会が開かれる。これは年間の村の事業に住民の意思を反映し、実行するためのものであり、大同（대동）^{テドン}会議といわれる。この大同会議に参加するのは尊位、洞首、有司、そして里長、漁村契長、老班会メンバーと各世帯主である。この場では過去6ヶ月間の決算報告と、村の総保有資源の管理問題を中心に村の重要関心事が扱われる。特に10月15日の大同会では5日前に老班会議で選ばれた村三役（洞中三任）の辞令状が授与される。それから10月30日に新旧役員の受け渡しが行われる。

大同会は村の新しい案件を取り上げ、議論し決定する機構というよりも老班会で決めた事項の報告を受け、承認する役割である。そのため、4月と10月の大同会が開かれる5日前の老班会で上程された案件を調整し、処理するという。

次に、洞任（村役員）はいわゆる現役の尊位、洞首、有司である。尊位は洞首の諮問役となり、洞首は村を代表する。有司は洞首を補佐し、会計業務を担当する。老班会議は前述のように年2回の大同会に先だって開かれる。10月の老班会では村の役員の選出が行われる。表2のようにそれぞれの退役集団から（時）尊位、（時）洞首、（時）有司¹¹⁾が選ばれる。またその際に臥尊位（65歳以上）、臥洞首（60歳以上）も選任する。洞規13条には「洞任選抜は前任順序と年長者 地方功労者を考慮し決定する」と規定している。実際に選定過程では各候補は有司、洞首の歴任の順序を考慮し先任者や年長者に譲歩し洞任歴任順に選抜される¹²⁾。

こうして老班会議（10月10日）で選抜された村役員は10月15日の大同会議で公表される¹³⁾。村役人の任期は1年であり、1年間村の大小事を担当することになる。

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

次に、老班会は洞中の諸財産を管理監督する（洞規第14条）。村所有の総資産の管理権は老班会にある。村の総資産として重要な意味を持つのは沿岸漁場である。ワカメが採れるチャム（諺：藿岩）¹⁴の管理、配分などその管理監督は老班会が担っている。かつてこの地域はワカメの生産が重要収入源であったという。したがってワカメ採取権は住民の重要関心事でもあった。このような住民の関心が反映したためか、洞規にはワカメ採取に関する詳細な規定がある。村の共有財産に洞民は同等の権利を持つ（第4条）。村の住民であれば誰でもチャムからワカメを採取する権利を持つ。ただし転入者には所定の手続きを経て資格が与えられる。洞規第7条には「1948年以降の転入者は洞中入参をしなければならない」とし、洞入参をしない者には洞所有財産を賦与することができないと明記している。また、洞中入参を行っていない者が洞器物を使用するときは指定された使用料を納めなければならない（4項）などの不利益も生じた。7条2項には「藿岩入参を済ましても洞入参をしていない者は洞規約を改定公布した日（1972年12月：筆者注）から2年以内に洞入参をしなければならない」とした。したがって、チャムすなわち藿岩入参より洞中入参が優先される。同3項には洞中入参と藿岩入参の方法について明示されている。

まず、入参希望者が洞有司にその旨を伝えると有司は村三役と座上に知らせ、合意を得た後に入参礼を行う。日本の「村入り」を思わせるような「入参礼」は4月と10月の定期総会において行われる。このときに入参希望者は昼食（白米8升）、濁酒（20升）、漁物（5貫分代金）、煙草（中品30匣）、また追加として白米20升又は現金を提供しなければならない。こうした入参礼を終えてこそ洞会での発言権が認められ、チャムの分配に参加できるのである¹⁵。それにしても入参礼を行うためには相当の経済的負担が伴うのが現状である。

また、子孫が分家し家屋を取得したときは藿岩入参だけを済ませば、藿

岩分配権を与えている。ただし、長男が分家した場合は藪岩権を与えないのが原則であるが、10年が経過すると藪岩権を与えている。

III 老班会と洞祭

1 祭官の選任と洞神祭の準備

直古洞では表2のように年4回の村祭祀を行うが、これらの祭祀は老班会が主管する。そのほかに別神クツに該当する霊神祭も10年に1回実施している。

まず、正朝祭祀は正月14日の晩12時、つまり15日の0時に行う。豊作を願い、1年間の村人の安全と安寧を祈る祭祀である。新米祭祀は旧暦の7月中に日取りを決めて行う¹⁶⁾。成主祭祀は9月3日であるが、この日はマウル会館¹⁷⁾を竣工した日であって、それに合わせて行っている。ちなみに、成主神は建物に宿っている神と認識されている。9月9日の重九祭祀はもと漁民たちによって行われた祭祀であったが、今は経費負担と行事進行を漁村契¹⁸⁾と老班会が共同で行う。

1) 祭官の選任

韓国の多くの村々では洞祭における祭官の選定は住民の中で不浄を避け、

表17 直古洞の村祭祀行事

| 祭 祀 名 | | 祭 日 | 司 祭 者 |
|------------------|-------|---------------|-------|
| 四 次 祭 祀 | 正 朝 祭 | 旧暦正月十五日 | 老 班 会 |
| | 新 米 祭 | 新穀購入期 | 老 班 会 |
| | 成 主 祭 | 旧暦九月三日 | 老 班 会 |
| | 中 秋 祭 | 旧暦九月九日 | 老 班 会 |
| | 霊 神 祭 | 旧暦九月九日 (十年毎に) | ムーダン |

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

「生氣福德」な人を選ぶのが一般的である。しかし、この地域では祭官になれる人は老班会のメンバーにだけ限られていて、その選出権も老班会が持っている。しかし、いわゆる名誉会員である臥洞首と臥尊位は祭官になる資格はない。したがって、出産、喪などの不浄がない限り（時）尊位、洞首、有司が祭官となる。祭官は祭日の旧暦9月3日に洞首以上が集まり選出する。資格は3年の間に不祥事がなかった家を選び、有司歴任順番に従い「清らかな人」を2人選ぶ。任期は1年である。また、2人の祭官の下に任意に選ばれた4人の里任（^{リーイム}이임）が従う。里任たちは主に祭物の準備や手入れなどをする。祭官は自由な身であるが、不浄なものを見たり、聞いたりしないように努めなければならない。

選ばれた祭官は家と洞会館、祭堂に注連縄を張り、洞祭の3日前には洞会館に2人で合宿しながら籠もる。これは不浄なものに接するのを防ぐためであるという。祭祀を行う前には沐浴潔斎をせねばならず、かつてはそれを海や川で行ったが、今は近くの温井里（^{オンジョンリ}온정리）にある白岩（^{ベガム}백암）温泉に出かけて行くという¹⁹⁾。

2) 祭物の準備

祭物（祭需ともいう）の購入は4人の里任たちが市場で仕入れる。車が多くなかった時代はチゲ（背負い子）で祭物を運んだという。そのときはみだりにチゲを地に下ろしてはいけなかった。今は車で買い物に行く。祭物は洞会館で整え、夜12時に祭堂に運ぶ。

祭物には果物として棗、干し柿、梨を使うが、栗とリンゴは使わない。そして、餅は白餅で、祭酒は新米と麴で直接作る。この時の水はウムル祭祀を行う所の水を使う。漁物は鯛、イカ、ヒラメ、明太、イシモチ、それに牛のしっぽを添える。ところが、魚は村で獲れたものは使わないという。これは「清らか」でない人が獲ったものであるかも知れないからであると

いう。その他には干し明太，皮を剥いたゆで卵，豆腐チヂミ，タン（湯）²⁰⁾，モヤシ汁，御飯を用意する。

供物を載せる祭器は真鍮の器で，ふだんは洞会館の押入に保管してある。洞祭に必要な費用は洞組織からの基金，共同漁場のチャム，洞財産の田（約450坪）と山（50町歩），そして老班の田（約900坪）と山（約50町歩）から得られる収益金で賄う。

2 直古洞の洞神祭

1) 正朝祭

村には二つの祭堂がある。一つは「尹氏コルメギ」を祀っている「ハルベ（할배）堂」であり，もう一つは「池氏コルメギ」を祀っている「オブ（漁夫）堂」である。二つの堂に関する文書はないので，由来は不明である。言い伝えによると，「ハルベ堂」のほうには「ソンビー（선비：士人）」が多く住んで，「オブ堂」のほうには漁師が住んで，それぞれ祭祀を行ったという。また，一説ではもとは「ハルベ堂」しかなかったが，後で「オブ堂」が作られたともいわれる²¹⁾。

堂会館で用意した祭物を夜12時前に祭堂に運ぶ。このとき，祭官1人，里任2人の3人を一組にして，一組を「ハルベ堂」へ，もう一組は「オブ堂」へと分かれて出発する。出発前に洞会館の庭で向かい合って「いってきます」と挨拶をする。「オブ堂」へ行く組は祭物と共に藁一束，ナイフ，バガジ²²⁾を持っていく。不浄払いのため，祭官の家から井戸を経て祭堂までの道に黄土を蒔く。黄土は不浄と雑鬼を祓う呪術的忌みがある。また，祭物を並べる前に予め用意した井戸水で祭堂の周辺を清める。準備が終わると時刻に合わせて二つの祭堂で同時に行う²³⁾。

一献目，二献目の酒を注ぐと御飯に匙をさし，箸を魚に載せたあと再拝する。そして洞神に村の無事と繁栄を祈る。

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

焼紙は洞神，洞民，漁師，農民焼紙の順に行う。「ハルベ堂」の祭祀が終わると，井戸のところに移動し，「清く澄んだ井戸水が絶えず出るように……」とウムル告祀を行う。この際，「オブ堂」では海に向かって藁を燃やし，持って行った包丁と共に不浄払いをする。

「オブ堂」の祭物をパガジに入れ，海辺にいて竜王国祭祀を行う。この祭祀は祭物を海水に捨てることで漁師と海で亡くなった者を慰めることで客鬼を解く意味を持つ。ウムル告祀と竜王国祭祀が終わると村会館に戻り成主祭を行う。このときも神に感謝の礼をあげ，洞民の安泰と無病，他所にいる子女たちの無事成長を祈る。

祭儀において（時）尊位は祭儀の全般を指揮する。祭物の準備などを行う都家の役割は主に洞首が担当する。有司は見習い役である。主祭官である尊位は洞民を代表し，司祭者としての地位を有するだけではなく，様々な村行事においても洞民から尊敬の対象になっている。洞祭の後から行われる「飲福」²⁴⁾ 行事は村における尊位の地位を伺わせるものがある。

すなわち，有司が退役尊位たちに飲福のことを知らせる。退役尊位たちが洞舎²⁵⁾に集まり名簿記載順によって座ると（時）尊位の指図にしたがって洞首が酒，杯，タン（湯）を載せた御膳を持って座上の前に跪く。両手で杯を座上に渡すと座上は酒を飲み，杯を返す。続いて座った順番通りに杯が回り，飲福の膳が各尊位の前に運ばれる。祭儀と祭物に準備に関する話，チャムと漁場管理問題などを話しながら食する。尊位たちの食事が終わると退役洞首たちと退役有司たちの順に飲福が始まる。そして，これが終わるとやがて一般住民たちに飲福順番が回ってくる。すべての飲福が終わって朝になると，座上をはじめ上尊位（退役尊位）たちの前で尊位が会計を担当する有司に祭物準備にかかった精算書を渡すと，大きい声で読み上げながら文書整理を始める²⁶⁾。こうした飲福の場での決算報告は村三役（洞中三任）が座上，副座上，また上尊位に知らせ，祭祀全般に関する評

価を受ける意味がある。

2) 新米祭

稲が実って収穫する際に行う収穫祭である。稲の収穫期になると村人の水田の中で一番早く実った田を選び、その水田の稲を丁寧に収穫してくれるように頼んで、3升ないし5升を買う。その米で供物を料理して祭祀を行うのである。祭祀はまず、尹氏コルメギ堂・池氏コルメギ堂から始まり、井戸の祭祀、成主祭を行うが、儀式は正朝祭と同じである。他村より早く稲が実って、祭祀を早く行う方がいいといわれている。

3) 成主祭

成主は村会館（洞舎）建物の神の祭祀である²⁷⁾。村会館の棟上げした日が旧暦9月3日なので、この日を成主の誕生日といって、村会館で供物を供えて行う。祭官は老班会の尊位または洞首・有司が担当する。祭祀が終わると、老班会の役員と村の長老たちを招いて飲福をする。

4) 重九祭

洞規には「中秋祭」と記されているが、この地域では一般に九の数字が重なる意味で「重九祭」と呼んでいる。本来は漁民だけで行う大漁祭であったが、今は村全体で行っている。それで、祭費も今は村で負担している。祭官の選出、忌み、祭物の準備、二つの堂から井戸へ、そして成主祭などを行う方式は正朝祭と同様である。

5) 霊神祭

10年おきに1回ずつ9月9日からはじまる巫俗の大漁祭である²⁸⁾。一般には「別神クツ（별신굿）」と呼ばれている。数年を周期にして行われる

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

こともあって洞祭より規模も大きく、莫大な費用を要する。また、この行事のためには相当の準備期間を要し、多くの人々が関わらなければならない。とりあえず、5-6月になると洞民によって別神クツ推進委員会が構成される。委員の選出や予算の策定は村会館で老班会の論議を通して決める。委員会は委員長を含め7名である（1992年基準）。その他20人くらいの方が手伝いをする。推進委員会は臨時の組織であり、クツが終わると、決算案を提出し、老班会の監査を受けた後、自動的に解散される。

別神クツ推進委員会の主な仕事は費用の工面とムーダンとの交渉にある。費用はたいてい漁村契のチャムから得られた収益金と10年間集めた資金と前回の残金を合わせたものである。また洞祭ごとに洞民たちから集めた寄付金の残りと、洞山や洞田からも得られる。他には当日他所からの見物客や村に縁故がある人が出した扶助金も含まれる。

この日はまず、9月9日の零時に、例年のように祭官によって重九祭が行われる。夜が明けて朝になると、ムーダンによる別神クツがはじまる。祭神は尹氏コルメギと池氏コルメギの両洞神であるが、両コルメギ堂では、クツの場所としては狭小なので、砂浜に祭壇を設けて行う。村にはムーダンがないので主に蔚珍のムーダンに依頼する。当日は首巫が十余名のムーダンを連れてきて、3日間クツをする。多様なクツの中には堂迎えクツ（당맞이굿）、成主クツ（성주굿）、竜王クツ（용왕굿）が特に重要視される。まず、堂迎えクツはコルメギハルベ堂と漁夫堂の洞神をクツ堂（굿당）に迎えないとクツを始めることができないので、そのためのクツであるので重要である。特に成主クツは村全体の平安と無事太平を祈るので住民の参加度が一番高いという。竜王クツは船主が中心になり、クツの内容も豊漁と関連したものが主である。

IV 巨逸里の洞組織と老班

1 巨逸^{コイル}一里^り（狗岩）の事例

蔚珍郡巨逸一里は平海邑からおよそ8km離れた海村である。この一帯でもっとも大きい厚浦港^{フボハン}からは車で北へ20分くらいの位置にある。海岸線に沿って村の前を幅約5mくらいの舗装道路が走っているだけで海と直に接している。地元では行政名の巨逸1里よりも古くから使われていた「狗岩^{クアム}」という洞名をよく使っている。里長は邑事務所との連絡に当たっている。村は、5班に分けられていて²⁹⁾、各班の班長は班内で選出される。主に行政上の伝達などの仕事をする。

漁村契は契長、幹事、監査が各1名、顧問を3名置いている。漁村契とは別に水産業協同組合の総代が1人いる。また、葬式に相互扶助をする葬式契がある。

洞共同事業の推進のために置かれている開発委員会（委員長は里長兼任）と農業協同組合総代（協同長は里長兼任）などが公的な洞の組織である。

以上のような組織は現代的な洞の組織といえる。ところが、狗岩には現代的な洞の組織の他に伝統的な洞役員組織がある³⁰⁾。それは尊位、洞首、有司という役員組織である。役員の数はいずれも各1名であり、旧暦の10月15日から1年間の任期をとめる。地元には「狗巖洞□員座日記³¹⁾（1866）」には尊位、洞首の称が見え³²⁾、また「洞案」（1909）には座上、尊位、洞首、有司の称が見え、今日の狗巖でもこうした職名が継承されていることが確認される。また、「洞安」巻末では、「尊位、洞首、有司、閭民」の順に4段の欄があり、それぞれの該当者の氏名が記されているという。

尊位とは狭義には1人であるが、広義に扱う場合には現役の尊位とその役を経た役職経験者を指している。その下位の役職である洞首、有司も同様である。尊位、洞首、有司を選ぶのは退役尊位集団である。尊位集団の

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

頂点にいる者を「座上」と呼んでいる。現在（1984年）の尊位集団は17人で構成されている。記名順にその年齢をみると、82・72・78・75・69・72・68・78・71・70・61・58・58・61・62・58・61歳となっており、必ずしも年長者順とは限らない。尊位集団は「オルン」と呼ばれる。狗岩ではオルンにならなければ一人前でないとされている。オルンは60歳を越えた人といっている。洞首の年齢幅は67-48歳、有司は50代・40代である。

狗岩では洞の中で役職を持たない戸主を「閒民」といい、閒民→有司→洞首→尊位へと1人ないし2人ずつ上がっていく。役員を選定基準として①座目記名順②出産・葬式の不浄がない③年少でもはきはきしていること、などである。①の記名順を重要な基準としているが、一部では生業や、祭官（役員が兼任）としての禁忌を守るのが面倒であることを理由に避ける傾向もあるという。結局、誰を選ぶかはオルンの会議で決める。すなわち、オルンの会議の決定が最高の権威を持つものであって、ある絶対的な基準に沿って行われているわけではない。

洞には様々な会議があるが、そのすべてにオルンは関与している。役員の昇進、祭官の選出は尊位集団、つまりオルンの会議で決まる。洞のたいの問題は尊位集団と洞首集団が集まって処理する。この会議を老班会と称している。さらに重要な事項については尊位、洞首、有司の3集団による臨時会議を開いて決める。定期洞会には尊位、洞首、有司、閒民（各戸主）と拡大される³³⁾。これらの会議では座上を頂点とし、尊位、洞首、有司、閒民の順に座順があり、各ランク内でも順序がある。役員はこういう会議の準備、後始末などをする。オルンはさらに、開発委員会の委員や漁村契顧問などにも名を連ねている。

役員は任期中、旧正月と重九（9月9日）のコルメギ洞神祭の祭官をつとめる。この時、尊位が首祭官、洞首、有司が祭官となる。祭費は洞資金から、飲福は洞会館で行われ、役員の負担は労力だけである。

2 巨逸二里の事例

巨逸二里は平海邑事務所から4 km 離れていて、約1 km 海岸線を持つ沿岸漁村である。古くから「方氏基盤に金氏コルメギ(방씨터전에 김씨골메기)」と伝えられている。温陽方氏(온양방씨)がこの地に住み着いたのは10代前の先祖からであるといわれている。そこから推定するとこの村は少なくとも300年以上の歴史のある村であると思われる。調査当時(1983年)の村は214世帯数、1,071名である。漁家91戸、半農半漁家45戸、農家21戸、その他57戸である。

村は巨逸洞中自治規約をもっている。その規約の適用範囲は蔚珍郡平海邑2里に居住する部落民に限定すると規定されている。この中には洞中運営委員会という組織があり、里長または開発委員会の業務を統制している。その運営委員会は洞中老班会の支配を受けている。以下、洞中運営委員と老班会について略述しながら考察を行う³⁴⁾。

巨逸二里は行政単位としての里洞とは別に、伝統的性格の洞中組織がある。洞中組織は洞中財産の所有管理や村落自治の主体でもある。

洞中組織は、洞中座上・尊位・洞首・有司から構成されている。洞中座は洞中の最高位者であり、洞中の象徴的の代表者である。尊位・洞首・有司を洞中三任(三役)と称し、洞中の財産を運営管理し、洞中行事を主宰・主管している。洞中座は老班会の座上も兼ねている。洞中三役は、老班会の会員の中から選ばれている。

また、洞中組織には洞中座と洞中三役以外に洞中運営委員会がある。洞中運営委員会は里長を含め、委員15名で構成されている。運営委員会には顧問会があり、老班会員10名内で構成されている。この顧問会は村の業務実行の最終決定権を持っており、運営委員会の重要案件は顧問会の議決を得て実行される。要するに運営委員会は顧問会を占めている老班会が実権を握っている。つまり、運営委員会は老班会の指示命令を受け村の実務

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

的仕事を遂行するだけの組織であるといえる。

老班会³⁵⁾の主な役割は、洞中の重要行事を主管し、洞中財産を管理、監督すること、老班会員の中から洞中三役を選出、任命すること、顧問会を構成するなど、洞中の最高議決機関である。

こうした性格を持つ老班会の会員になるための資格は、まず、60歳以上の男性住民に限られ、所定の手続きを経て会員になる。すなわち、60歳になると加入を申し込み、老班礼（新参礼）を終えて、老班会の卦帖録案に登録して会員になる。しかし、有司の経歴有無によって老班になる早さや待遇の差が感じられる。つまり、60歳以下にも洞中有司を歴任した人は老班になることができる。崔在律の調査では、1983年当時の老班会の総人数は65名であった。巨逸二里の60歳以上の男性が44名であることを考慮すると、60歳未満で老班になった洞中有司歴任者が21名であることがわかる。その中で一番若い老班は37歳であり、船員の中にも老班がいるという。

洞中有司の経歴を持たないで老班になった人を「卦老班（괘노반）」又は「卦帖老班（괘첩노반）」というらしく、洞首、尊位になっても「卦」が付きまわり、卦洞首、卦尊位と呼ばれる。また、卦帖出身老班は最高齢者であっても洞中座上になることができないという。さらに入出入りする門も違うというほど、洞中歴任者とは確然たる差が見られる。それで、早く老班になりたい希望と、卦帖老班の不名誉から除かれるため、前もって有司の希望を申し込み、指名されるのを待っているという。それは洞首も尊位も同様である。希望しない人が指名されることはありえないといわれる。

洞中三役の任期は、以前は1年であったが、今は6ヶ月である。洞中有司を希望する人が多く、また洞中有司の期間が1年になると生業にも支障があるという意見もあって短縮したという。

老班は住民の尊敬の対象であり、優遇される。若い者たちが村を離れ、村外で成功し、老班会に喜捨するのを誇りとしており、彼らも老班会で称

賛されるのを一生の名誉と思っている。

V 老班会の特質と地域社会

今まで平海面の直古洞，巨逸一，二里で見られる「老班会」の性格と役割，地域社会との関連性について触れてきた。ここでは改めて老班会の特質を整理してみようと思うが，その前にまず，「老班（会）」という言葉について若干触れておきたい。すでに前述したように松本誠一は「老班」を「老両班（노양반）」あるいは「老人班（会）」の意味として理解しようとした。また，崔在律はもと「老班聚（노인취）」又は「老班契（노인계）」とも称したのを現代的名称を使って老班会と称しているといった。しかし，いずれも老班の意味を明確に説明するには不十分である。私はあえて「老年」・「壮年」・「若年」といった年齢と社会的ステイタスをも含めたものを「班」というランクに表して「老年班」つまり「老班」と称したのではないかと推測される。しかし，いずれにしても現在の韓国社会では一般に使われている言葉でもなければ，本章で取り上げた平海邑の他に，厚浦面以外には見受けられない言葉である。また厚浦面と接している盈徳郡ではいっさい聞くことのない語である。これまでの調査報告でも「老班」は蔚珍郡内の一部地域社会において使われているようである。なぜ，この地域でしか見受けられないのかは今のところわかりかねないが，調査を広げていくと，例えば蔚珍郡と北に接している江原道などには残っている可能性がある。しかも前出したように「老班」というのが朝鮮時代の洞・里の長を指す言葉であるとしたら，韓国のもっといろいろな地域で出会える可能性はあるのではないと思われる。

次に，現在の地域社会における「老班会」の役割について見てみよう。事例から見る限りでは老班会は村組織の頂点にある「最高の議決機関」として理解できる。直古洞には有司から洞首，尊位といった洞中三役がいる。

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

老班会はこの三役の中から洞首と尊位、そして複数の洞首歴任集団と尊位歴任集団から構成されている。老班会のトップを「座上」といい、尊位歴任集団から選ばれる。老班会の中での序列はあくまで名簿記載順であり、必ずしも年齢順とは限らない。

老班会のメンバーになるためには、まず有司の役職に就いて1年間奉仕をしなければならない。また、有司から上の段階に昇進するには有司歴任順序と年長順、功労などが決め手となる。

巨逸1里では洞中三役を選ぶ尊位集団を「オルン (어른)」と呼んでいる。3つの集団の年齢は、尊位82～58歳、洞首67～48歳、有司50代・40代となっている。

巨逸2里では60歳以上の男性であれば所定の手順を経て、老班会のメンバーになる。また洞中有司を歴任した人は60歳以前にも老班になる。そのため、有司を経て早く老班になりたい人は、有司の指名を受けるため、指名運動や選挙運動をするのも珍しくないという。つまり、老班になるには一定の年齢を有するが、だからといって必ずしも年齢順であるとはいえず、壮年以上の年齢層の中から、村の役職経験者が優先に加入する構造となっている。一定の年齢ごとに集団化して、年齢順に従い、下位集団から上位集団へと昇っていくいわゆる年齢階梯的要素はほとんど見られず、優先されるのは前段階の洞役職に就いた順序である。巨逸一里の洞役職の選定基準のひとつに「年少でもはきはきしていること」を挙げているのは、年齢の順位が役職につく順位でなく、地域社会に実質的に貢献できる人物が求められていることを示唆しているといえよう。

老班会の主な役割は、洞中行事の審議決定、洞役員の選抜、洞中財産の管理監督である。それに加え祭祀行事と集会行事も老班会が管掌している。特に村所有の財産である漁場の管理・監督権を握っている。住民の重要収入源であるチャム（ワカメの採取地）の管理や分配などを通して地域社会

を経済的にコントロールする側面を有している。

経験的知識と村指導の経歴を持つオルン（어른：大人）によって構成されている村の元老会議ともいえる老班会は漁村契にその機能の一部を譲渡した場合もあるが、まだ東海岸沿岸地域の大部分の村では依然として影響力を行使している。村のオルンたちの集まりである老班会は地域住民の意思を集約させ決定するほか、村役員の選出とほとんどの事業や行事を管掌している。老班会で決めたことは絶大な権威を保つようになる。また老班会の役割として賞罰に関する審議も行っている。洞規第9章賞罰にはワカメの不法採取者には2年間の藪岩権を剥奪している。漁村契が共同漁場の管理権を法的に付与された後にもチャムだけは老班会（洞中）に献上し、老班会の管理下において規制を受けてきたのである。また、親孝行の者には賞を与え、親不孝の者に対して一次的には2年間洞会の参席を禁じ、二次的にはその家に対しては2年間藪岩権を没収したり、親不孝者は永久の洞会への出席を禁じたり、秩序破壊的行為には厳しく制裁も行うなど村自治組織としての機能も果たしているといえよう。

もう一つ、老班会の機能の中で注目すべき点は洞祭における役割である。

これまで見てきた多くの村祭祀である洞祭の場合、その祭官の選定は住民の中で不浄を避け、「生氣福德」である人を選ぶのが一般的であった。しかし、本章で考察の対象とした事例村では祭官になれる人は老班会のメンバーにだけ限られていて、その選出権も老班会にあるのが大きな特徴である。直古洞では、いわゆる老班会の名誉会員である臥洞首と臥尊位を除いて出産、喪などの不浄がない限りに（時）尊位、洞首、有司が祭官となる。その際、尊位は祭儀の全般を指揮する。祭物の準備などをする都家の役割は主に洞首が担当する。有司は見習い役である。主祭官である尊位は司祭者としての地位を有するだけでなく、洞民を代表し、様々な村行事

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

においてもオルンとして洞民から尊敬の対象になっている。たとえば、10年おきに行われる神霊祭（別神グッ）の時には、老班会が別神グッ推進委員を選出し、予算の策定も行う。別神グッが行われる会場では上席にあたる前列には常に尊位の席が設けられてあり、その存在感が大きく示される。

以上のように老班会は村の自治組織として村社会をまとめ、村民の生活規範にまで深く関与している。さらにコルメギ洞祭においては直接司祭者をつとめ、別神祭にも主導的役割を見せている。老班は現代において、共同体社会の祭政一致を具現しているかに見える。それは社会的・宗教的装置として機能している一つの事例であるといえよう。

む す び

これまで平海邑一帯の村で見られる伝統的洞組織の一形態である老班会について、既存のいくつかの事例報告を通して考察を試みた。

「老班会」は今のところ、韓国の東海岸のごく一部の地域、主として蔚珍郡内の漁村地域でしか現れない村落自治組織であるといえよう。老班会といっても村によって名称や機能も若干異なっている。事例で見てきたように老班になる基準も一定でない。また、老班会という組織がある村では、洞を代表する里長をはじめ、漁村契や開発委員会などの現代的な洞組織をも有している。しかし、こうした現代的洞組織も、事実上、老班会の影響下に置かれており、「オルン」の集団でもある老班会が指南役としてほとんどの村の行事に関与している。たしかに、老班会はオルンとよばれる長老たちの権力機構として機能しているところがある。

韓国社会では、伝統的にオルンである老人の権威は非常に強く、特に村社会の中では強い発言力を持っていた。それゆえに、村の仕来りに従わなかったり、洞規を乱したり、村で不貞を働いた者の処罰を決定する裁判官的な権威を持っていた³⁶⁾。しかし、このようにオルンたちによる老班会と

いう組織を形成している村もあれば、制度的にはそのような会を持たず、オルン組織を指す名称も存在しない村もある³⁷⁾。東海岸の村落の場合は老班によって祭祀権が独占されることもあるが、そのような制度が存在する村落のほう韓国では普遍的でなく、むしろ特殊な事例であるといわざるを得ない。

では、なぜ蔚珍郡内でこのような「老班会」という制度が存在しているのかについては、今後も綿密な調査が必要である。すでに述べたように江原道などの海村地域にも残っている可能性も考えられるが、これまでの江原道地域を対象にした民俗調査報告書などには「老班会」が全く言及されていないのが現状である。

注

- 1) 崔在律「漁村自治共同体の残存形態」『日韓合同学術調査報告（第2輯）』（日韓漁業社会・経済共同研究会）1984，107頁
- 2) 権三文の『동해안 어촌의 민속학적 이해』民俗苑 2001，李俊遠「어촌계의 성격변화에 관한 연구」（慶北大学校碩士学位論文）2001などを参照されたい。
- 3) 日韓漁村社会・経済共同研究会『日韓合同学術調査報告（第二輯）——韓国慶尚北道平海邑厚浦里——』1984。
- 4) 日本語訳としては「礼俗と民俗の変容に関わる一試論——東海岸一農漁村における民俗祭儀の班礼化現象——」『日韓民俗文化比較論』（九州大学出版会，2000）を参照されたい。
- 5) 金宅圭『東海岸漁村民俗誌』嶺南大学校出版部 2000。
- 6) 権三文「동해안 연안촌락의 질서와 가치」『민속학연구』제2집 安東大学校民俗学科 1994，前掲注1）（権三文）に再収録。
- 7) 松本誠一によると「老班」という語は「老班会」の略語または「老人班（会）」の意味ではないかと推測している（前掲注7）の241頁）。
- 8) 「前文」に1972年12月に改正する旨は書かれてあるが、いつ作られたのを改正したのかは定かではない。

韓国の海村社会における老人集団と村祭り

- 9) 「洞規」及び当該事例に関しては前掲注5)に従う。
- 10) 『民俗学研究』第2輯 安東大学校民俗学科 1994, 106頁。
- 11) はじめて役員の中に入るので一般の壮年層の中から選ぶ。
- 12) 前掲注5)の31頁
- 13) 村役人の選抜は将来的に老班会の会員候補になる対象を選定する老半会の充員制度としての機能も持っている。
- 14) ワカメ, ウニ, ナマコをはじめ, 海藻の棲息地となる水中の岩で形成された地域である。
- 15) 藪岩の分配は2年ごとに陰暦の6月15日村会館で行う。
- 16) 1992年度には旧8月30日に行われた。一番先に初収穫した家の米を購入し使うのだが, この年は隣の村から買ってきたという(前掲注9)の121頁)。
- 17) 1976年6月に当時の大統領からの下賜金に住民らの資金を合わせて建立したとされている。
- 18) 1961年に発足し, 契員数85世帯(1992年現在)である。契員は6ヶ月以上村に居住した人で, 漁業に従事している者に限られている。また, 水産業共同組合に一定の出資金を納めなければならない。漁村契の組織は契長, 幹事, 監査, 理事が各1名である。契長は契員たちによる投票で選ばれる。
- 19) 前掲注10)の123頁。禊を温泉にしたのは何十年前からであるらしく, 経済事情がよくなったことと, 年寄りが多いことも考えられる。
- 20) 豆腐, 大根, 牛肉を刻んで煮た汁物で祭祀によく使われる。
- 21) 前掲注9)の121頁。
- 22) ひさごで作った水汲み容器。いまはプラスチック製品が一般的である。
- 23) かつては「ハルベ堂」より「オブ堂」へ松明で信号を送ったという。
- 24) 祭祀に飾った供え物を洞民全員で食べ, 親睦を深める直会。
- 25) 村人の共同会議の場になったり祭場になったりして村の重要なことを行う場である。「マウル会館」ともいう。
- 26) 前掲注5)の29頁。
- 27) 玄容駿「厚浦・直山の村祭り」前掲注3)の206頁。
- 28) 以前は3年, 5年ごとに行われたが, 10年に変更になってから3回目である(1992年基準)。前掲注10)の154頁。
- 29) 110世帯, 545人(男271, 女247)である(1984年現在)。

- 30) 狗岩の事例は松本誠一「東海岸狗岩のコルメギ洞祭神と洞組織」（前掲注2）に掲載）を参照にした。
- 31) 「座目」とは一般に「席次を記した目録」の意味のようである（前掲論文239頁）。
- 32) 尊位，洞首は朝鮮時代に里・洞の長の称に該当する。（前掲論文239頁）。
- 33) 会議に女性は参席しない。女戸主と不参席，欠席した戸には会議の結果を放送により伝達される。
- 34) 巨逸二里の事例については崔在律「漁村自治共同体の残存形態」（前掲注2）に掲載）を参照した。
- 35) 巨逸二里では老班聚または老班契とも称されていた（前掲注の112頁）。
- 36) 金光億「伝統的生活様式의 政治的側面」『伝統的生活様式의 研究（下）』韓国精神文化研究院 1984。金宅圭『韓国農村祭祀の研究 下巻』第一書房 1997。
- 37) 今日よく見かける「敬老堂」は1970年代以降，老人福祉の目的で各村落に多く建てられた。老人一般に開放され，ここに集まる老人たちの間には階層的意識は薄く，村の行政に関わることはない。「マウル会館」を敬老堂の代わりに使うところもある。

Old Men's Groups and *Matsuri* in Korean Fishing-Village Society ——Mainly 「*Robanhea*」——

Samchang CHOI

This paper is a study of the old men's groups (*Robanhea*, 老班会) seen in Korean fishing-village society, particularly of one old men's group in Uljin county located on the Korean East Coast. As well as being a village self-government organization, it also functions as a religious service organization.

The old men's group becomes the hierarchical structure called *joni* (尊位), *dongsu* (洞首) in *zasang* (座上) from the bottom to the top. These are divided into the active group and retired group. “*Robanhea*” is organized by active *joni* and *dongsu*, consisting of one of each, together with *joni* and *dongsu* of the retired group. Active *joni* and *dongsu* say three village officers with *yusa* (有司) are chosen from among general inhabitants. When *yusa* passes through service of one year, he enters the retired *yusa* group, and is registered for the first time on a “*Roban*” list. One is chosen as active *dongsu* of the next stage from among this retired *yusa* group. List order, seniority order and service are considered, but priority is not always given to an elder on this occasion.

The main role of “*Robanhea*” is taking decisions about village events, the election of officers, and management of the village property. Sanctions are applied to things which disturb the order of the village. In addition, one more important role of “*Robanhea*” is to be in charge of village religious services. It is not permitted to never become a member of “*Robanhea*” in village society. A person who passes the age of sixty is honoured with a service called “*Robanrei* (老班礼)”.

“*Robanhea*” is an example of the role played by *Orun* (大人) in Korean

village society, and is a keyword for understanding the fishing-village society of the Uljin area. Further elucidation of its role is required in the future.